



父親のための最新情報

# 大学評判記

連載 ⑮

## 東京外国語大学

# 往年の人気いまいずこ

秩父セメント会長で、財界にあつて教育問題に最も熱心な一人である諸井虔は、日本の大学の語学教育に対する厳しい批判者でもある。

「日本語のあいまいさは、日本社会の特質とも深く通じており、英語という論理的な言葉に置きかえてみると、議論のあいまいな点がよくみえてくる。こうした英語による発想というものを身につけることこそ語学教育なのに、文法や読解に偏った日本の大学の語学教育はカタワといつても言い過ぎではない」



### 上智 ICUへと流れる合格者

日本の大学の語学教育のルーツとしてもいふべき東京外国語大学の現状もこの例外ではなさそうだ。キャンパスや、外語大をとり巻く企業からの声をたどつてみると、浮かび上がってくるのは、日本社

会が人とカネの両面から国際化を急ピッチで進めていくなかで、それに反比例するように翳りを増していく語学専科大学の姿である。

英米、仏、独語はもちろん、朝鮮、モンゴル、インドシナ語など他大学にはない少数語学科を揃え、計十六の語学科を擁する外語大は、一学年六百三十五名、全学年で二千五百名という、いたって小規模な大学である。各科の定員も十五名から、多くて英米の七十名までである。

今年からの国公立大の受験機会複数化により、外語大の競争倍率は各語科とも軒並み前年の数倍という人気となった。しかしこれは、かけ持ち受験が可能になったという制度上の自然増で、外語大入気が上昇したもので決してない。むしろ、人気は下降しているという。

旺文社入社情報局長の代田恭之によると、「ここ数年、志願者数にそれほど変化

はなく、この面からは人気低迷とはいえない。しかし問題は外語大合格者のかなりの部分が併願した私立に流れていること。志願者の半数以上が女子という最近の傾向もあつて、津田塾、上智、ICUへ流れる学生が多く、合格率でもこれらの私大の方が難しい。外語大は「国易私難」といわれる現象の典型」という。

代田が指摘する外語大不人気の理由は、①殺風景、無味乾燥なキャンパスのイメージ、②通訳、語学屋といったイメージに結びつく語学オンリーの均質性、③共通一次以降、数学が加わり文系学生が敬遠したこと——の三点である。

しかしこうした外面的な条件は、外語大の究極的な要因とは考えにくい。

英米語学科のOBの一人で、読売新聞の元ニューヨーク特派員は、「我々の時代、一橋を実学の雄とすれば外語は語学の雄という自負があつた。当時は語学を学ぶ

には外語をおいてなかったし、集う学生にもエリート気概がありました」とふり返る。彼が卒業した昭和三十年代は折しも高度経済成長期。外語の卒業生は商社、金融に引張りだつて、好きこのんで新聞社へ行く者は珍しかったという。

ところが、最近目立つのは「言葉の使えない外語卒」という世評である。企業、一般からいへば、語学屋の域を出ない、あるいは、しゃべれない、というのである。民間の海外留学生派遣財団であるサンケイスカラシップは、二十数年にわたる大学生を米国、英国など五カ国へ送り続けてきた。石川洋之事務局長によると、例年百倍ほどの競争率の試験を通つてくる学生の出身大学は東大、京大、早慶が多い。外語大については、「総数は多いが、かつてに比べ最近が目立たない。あのこの大学はどうも語学が先行しがちで、うちが求める学生は広がりを持ったデー

マの持ち主」と評す。

ロシア語科を卒業し現在時事通信外報部に籍を置くあるOBは、「外語の連中ははつきり言っただけじゃない」と、世評を否定しない。「授業は厳しかったが、語学、文学、思想というアカデミックな方面に重点がおかれ、会話などブラクティカルな授業は一、二年次で週に一度でしただけ」という。語学は手段にすぎず、それよりもその国の歴史、文化、社会の理解度を深めるといふ外語大の姿勢はそれなりに貴重ではあるが、結果として上智・ICUといった実践的な語学教育の大学に大きく遅れをとってしまった感はないといふのである。たとえばその違いは、外国人スタッフによる授業数、会話にアプリングの授業数の差に歴然としている。

学生部長を務める教授・金丸邦三は、外語大のカリキュラムが「読み、書き」中心であることを認める。「その国を理解するためには、文化、社会を知らねばならない。そこでどうしても文献中心の読解が多くなる。」

ロシア語学科教授の原卓也は、外語が言葉の専門の学校といっても、一、二年次の語学は週六コマで、これではとても足りない。かと言ってリベラル・アーツ型に徹することができるとか

いえば、そうでもない。現代にあつて外語大自体がどつちつかずの中途半端な存在になっている」と現状の問題を認め、これが外語評価の低下の一因ではないかという。

最近、同大が卒業生にあるアンケートを実施したところ、男子学生と女子学生のニーズにかなりのギャップが目立ったという。いま外語大は全体で女子が約七割を占め、ベルシヤ語は八八%、スペイン語八〇%、中国語七四%と、さながら

女子大の趣だが、その女子が外語大に求めるものは語学・文学であり、少数派の男子が求めるものは幅広い国際関係であった。こうしたことから「どちつかずより、いっそのこと語学系と国際関係系に学部を分けてしまおう」とする意見も学内には存在する。

もう一つ、関係者が指摘するのは「話すことが苦手の教員が最近多くなってきた」ということである。教授の評価が論文によって決定され、話す能力を軽んじ

る傾向が強いアカデミズムの体質が、これに拍車をかけているというわけだ。

### もはや歴史的 使命は終わったか？

東京外語大の歴史は明治六年に創設された東京外国語学校に始まる。そのねらいは先進文明圏としての欧米文化の摂取や、植民政策の勃興期にあつた日本が海外へ門戸を開くための「語学の尖兵」の養成であつた。

#### H・ラシュドールの「大学の起源」の

訳者として知られる国立教育研究所次長の横尾壮英によると、欧州では十八世紀から十九世紀にかけて、列強の帝国主義の広がりによって、東洋語やアフリカ語のための専門の学校がナポリ、パリ、ロツテルダムなど各地に相次いで設けられた。しかし、こうした時代の要請で生まれた大学は、今世紀に入り生彩がない。たとえばイタリアでは今世紀に入り何も言葉の学校がナポリだけではなくなり、特殊性が失われ、独占体制は崩れた。

「今、語学の習得に熱心であるのは、たとへば中国です。中国はちょうど日本の幕末と同じで、文化、経済のギャップを埋めるための兵隊が必要。英語に続き日本語アームでその数は全国で百万とも二百万ともいふ。こうした外国語アームは



国電雑貨駅から染井農園を抜けてキャンパスに辿り着く



いまや東京女子外語大学ともいわれる



学べる環境にある。これだけ外国への行き来が自由なのだから、外国へ行った方が早いとも言える。外語大がその特性を生かせるのはタイ語、インドシナ語などアジア、中東、共産圏などを中心とした専門性の強い語学ではないか」

二十世紀後半の、日本社会をとり巻く著しい国際化の波が、外国語教育をめぐる基盤をすっかり変えてしまった、という指摘に他ならない。

語学スペシャリスト養成という、外語大の役割の衰退を最も敏感に受け止めているのは、もちろん企業関係者である。

「語学ができるからその人物を採用する、ということはずまない。仮にあるとしても、その場合は専門職（大手都銀）という声为代表するように、企業の多くは語学力を特殊能力と見なさず、総合的な資質を重視している。

「商社、メーカーも現地生産、資本の海外移転など海外シフトの時代で、海外に人を出すのが当たり前になってきた。現地へ出せば言葉はそれなりに身につくし、人脈も出来るから、あえてスペシャリストを求めなくなっている」(就職問題評論家・松浦敬紀)

これまで商社にせよ、金融にせよ、外語卒であれば話せようが話せまいが、完全な専門家として採ってきた。その結果が、

セクションに埋もれる、トップになれない、と評される外語卒の姿ともいえる。

しかし、海外進出のノウハウを蓄積し、外国語が特別の要素ではなくなった企業にとり、外語の学生は必ずしも必要な人材ではなくなった。今年、大手商社九社で採用した学生は八百六十名。そのうち

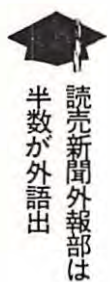
語学要員は一割弱で、一社多くて十名、平均すれば六、七名と、各社が採用する語学要員は年を追って減少している。この小さなパイを、外語は他大学と激しく奪い合うことになる。

昭和三十年代のある年の仏語科の就職(男子)をみると、三十名中約十名が三井、住友をはじめとする商社であるのに、六十一年には一名しか商社に進んでいない。かつては商社界で東大と競った外語勢も、今は早稲田、慶応にその地位を譲っているという。

専門性よりも総合能力、つまりジェネラリストを要求する企業が、注目し始めたのが、総合大学の外国語学部出身者であり、続いて最近では、帰国子女、海外大学卒業生という新しい存在である。富士銀行や三菱商事といった大手が率先して帰国子女を採用しているのは、語学要員としてではなく、基礎能力、豊富な体験、

「従来の、語学屋」という概念ではなく、

企業は日本で教育されてきた人々の中に彼らを選ぶ、こみ啓発させようとしている必要とあれば、外国人そのものを採用する時代もくるでしょう」(諸井)



これから、スペシャリストとしての外語卒が企業社会でどう迎えられていくのか、関係者の見る目は厳しい。

松浦は「外語大OBは、これまで海外進出のノウハウをあまり持っていない中小企業とか、海外要員が急に必要となってきた建設業などしか受け皿がなくなってくる」と予測する。

これに対し、諸井は「別の意味でのスペシャリストの時代がまた来る」と述べ、時代に応じた新しい役割を模索すべきとする。

「企業はこれから人を多くかかえられなくなる。必要に応じて外部から専門家を呼び、人材のネットワークを伸縮自在にして企業が動いていくようになる」と、専門家が活躍する場面は広がっていく。「語学屋」からの脱皮の試みが、外語大内部にないわけではない。

例えば国際関係論の教授、中嶋順雄の

クイなど他の途上国でも同じでしょう」

日本の場合、戦前の東亜同文書院が大座を中心としたアジアへの軍国支配の尖兵、養成といったねらいが濃厚だったのなら、東京外語大の場合は日本の近代化に伴う、海外文化のイントロデュースーをめざしたと言っべきかもしれない。

しかし、その役割はすでに終わったのではないか、との声がある。

「外語大は英、独、仏語をやめればいいと思う。そうした言語は一般の大学でも



ゼミ。専門の語学を問わず、学生を一年次十七五人に絞り、冷戦、中ソ関係、米のアジア政策などをテーマに共同研究を進める。ゼミ機関誌「歴史と未来」の刊行、現役のビジネスマンやジャーナリストによる講義、海外フィールドワークといった、多彩な活動を繰り広げている。

OBの活躍の場も、商社やジャーナリズムといった従来の外語卒の土俵から踏み出し、国際機関、金融など多様な広がりを見せている。

「本当は国際関係を学びたかったが、語学・文学の比重が大きく満たされない気持で卒業した」という中嶋は、人文・社会科学系としてはわが国初の共同利用研究所として知られる、外語大のアジア・アフリカ研究所とも協力し「語学をもとにした国際関係の総合大学を目指したい」と意欲をのぞかせる。

二葉亭四迷や永井荷風、石川淳というに、戦前から戦後にかけて東京外語が持ってきた風土は、多分に文学的、リベラン（自由人）的であったよつである。そのためか、ジャーナリズムには多数のOBたちを送り込んできた。

読売新聞社の場合、編集局長の水上健也（仏語）、局長の阿部義正（中国語）をはじめ、外報部は半数が外語卒という。

前出の読売元ニューヨーク特派員は「串田孫一、金田一春彦などが教管について、語学そのものを学ぶというよりも教養主義的な色合いが強かった」という。

外語が時代にとり残されていくという危機感の反面で、教員やOBの間にはそうした自由な校風を懐しむ声もある。

時事通信編集委員の藤原作弥（仏語三十七年卒）は、当時新分野であった比較文学を目指し外語大の門をくぐった。

「私は外語大を愛しているし、軽蔑もしていない。外語大は私にとって、海外文学の窓口でもあり、とっかかりでもあった。しかし憧れの一方、学生や教師があまりにも語学を目的とみなす姿に失望ししました」と、藤原はふりかえる。

これからの外語の行き方について、藤原は「特殊性を生かし、教養なら教養でラテン語の根の部分をしっかりおさえるような、目的のはっきりした単科大にすべき」と注文する。

ベトナムと北朝鮮関係の商社に勤めるOBの太田宏（インドシナ語学科）は、「特殊語学だけに本当の少人数教育だった。ベトナム語やモンゴル語など特殊な語学を抱える大学は少ないから、外語の存在は貴重」と話す。

しかし授業がアカデミック過ぎて、「語学の実用に向かない」という点では、太

田も外語の現状に批判的だ。

ジャーナリストも商社員も、海外で本格的な仕事をする際には通訳を使うことが多い中で、太田はベトナムのホーチミン市へ出張する折は、自身のベトナム語でビジネスをするという。

「商売をするなら、その国を知っていないてはダメです。その国の歴史や文学を知り、その言葉を理解すれば、決して相手を馬鹿にすることはない」と語る言葉は自信に裏打ちされている。

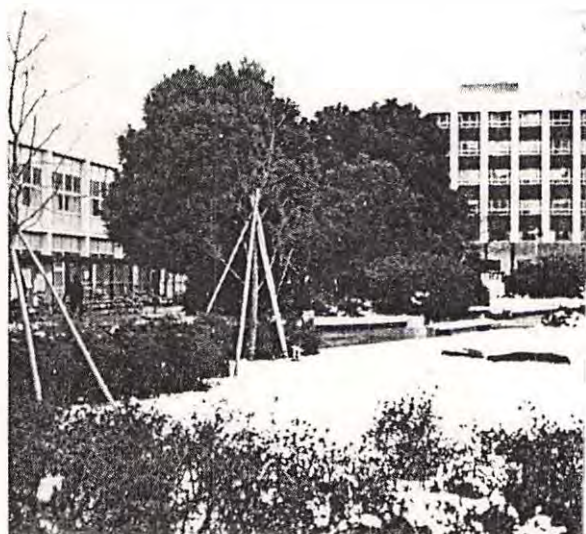
太田に代表されるように、外語大の特殊な語学科、その少人数教育は、現代においてなお価値を持つものかもしれない。

### 神田外国語大学の新しい試み

しかし、「外国語で食べている職業人は、このままでは石炭や国鉄と同様、斜陽産業に組み込まれる」（横尾という指摘があるように、従来の日本の語学教育の頂上にあつた外語大は存在そのものを、時代的に問われていることは間違いない。

この巻、千葉・葦原に発足する神田外国語大学は、こうした外国語教育をとり巻く荒波の中で、東京外語大元学長の小川芳男を学長にして生まれた新設私立大学である。

英語を中心とした会話学校を母体とし



将来キャンパスは府中飛行場跡へ移転

たこの大学のねらいは「異文化コミュニケーション」という考え方を前面に押し出した語学教育で、特に環太平洋時代を意識して英語、スペイン語、中国語、韓国語の四学科を置いている。

小川を始めスタッフの多くに外語の教員OBが名をつらねる。

「語学は実学、教養のどちらでもない」というのが小川の特論で、ここでは「しやべれない外語卒」という外語大での経験への反省を踏まえた、新しい語学教育を目指すともいわれる。

曲り角に来ている東京外語大の「影絵」という意味で、その成否が注目される実験ではあろう。

（敬称略）